

## コメント

### 前田直子 希望表現「～たいです。」をどう教えるか ——話しことばにおける使用を中心に

論文はアカデミックライティングの典型とされ、手紙やメールといったコミュニケーションの伝達手段とは大きくタイプが異なるとされることがある。しかし、実は論文は「伝達手段」にはかならない。何を指し、何を明らかにしようとしているかが一読しただけで読者に伝わらなければならない。本研究は希望表現「～たいです」が初級文法項目であるにもかかわらず、不自然な使用が散見されるという現象を指摘し、多種多様なコーパスと教科書調査に基づき、その謎を解き明かしていく。その論旨、展開は極めてわかりやすく、一度読んだだけで他者に説明できるようになるほどスムーズに理解できる。内容についても日本語教育文法として極めて重要な指摘であるが、問題提起・データ提示・論理展開といった「説明の仕方」として学ぶべきところが多い論考である。(A.M.)

### 道法 愛 シナイの「未完了」の使用文脈について

アスペクトは主題と並んで日本語学において蓄積の多い分野であると言える。そこに日本語学的な新たな知見を見いだすことは容易ではない。しかし、日本語学において指摘されている事項が全て適切に理解され、日本語教育に応用されているかといえばそうとは言えないだろう。本研究はシナイの「未完了」の使用文脈について、学習者の理解・運用を目指した文法記述の基盤を作ることを目指したものである。いわば日本語教育文法ということになるが、その場合に気になるのは「学習者の負担」である。本研究では伝達効果を6つに分類しているが、その分類をそのまま学習者に与えるのでは負担になりかねない。使用文脈の整理は価値のある作業であるとは言えるが、日本語教育への応用という点では具現化までもう一步のプロセスが必要と感じられる。(A.M.)

---

金 瑜眞・丸島 歩・桐越 舞

ミャンマー人日本語学習者の [tsw] と [sw] の発音と聞き取りに  
関する実証的研究

音声は母語干渉の影響が端的に表れやすい領域であると言える。ビルマ語には歯茎摩擦音 [s] は存在するが、歯茎破擦音 [ts] は存在しないことから先行研究でも「ツをスで代用する場合があります、聞き分けも難しい」と指摘されている。したがって、ミャンマー人日本語学習者においては「夏（なつ）→茄子（なす）」といった誤用が頻繁に見られるという点が問題の焦点となる。本研究は、ミャンマー人日本語学習者に対する実証的研究として、発音だけでなく聞き取りを対象とした点が興味深い。結果として [tsw] の発音が困難である点は予想通りであったが、聞き取りにおいては直前音の影響が大きい点を明らかにしたことは、具体的な聴解指導に資する指摘であり、日本語教育への直接的な貢献を示唆した論考であると言える。

(A.M.)

---

張 明 なぜ「母はタバコを吸うきらいがある」は不自然に感じるのか

本論文は「きらいがある」について、コーパスに基づきその文法や意味を記述した研究である。従来の「そういう傾向がある」といった抽象的なレベルでの記述では不十分であることを、本論文のタイトルが端的に示している。本論文は「きらいがある」の使用環境を「①一般的な主体」「②性質や特徴を明示する」「③「よくない」という意味を明示する」というように3つにまとめている。本論文の特徴は、第6節において、学習者に示せるような形で成果をまとめている点にある。日本語教育文法の記述はこのように現場で利用可能な形でまとめられることが望ましい。

(N.N.)

チョーハン アヌブティ・ゲエン ティ ミン

動詞の他動性が格助詞選択に及ぼす影響

——ベトナム語を母語とする学習者を中心に

日本語とベトナム語は同様に他動性の高低に関わらず典型的な他動詞構文をゆるす言語である。ベトナム語を母語とする日本語学習者の格助詞ヲの習得状況について、動詞の他動性の度合いに焦点を当て考察したところ、日本語の習熟度に関係なく、他動性が高いカテゴリーと低いカテゴリーの間に統計的な有意差がみられ、他動性の度合いが高いカテゴリーほど習得しやすいことがわかった。この結果はベトナム語と異なる文法構造を持ち、格関係を後置詞で示す言語に対する先行研究と同様で、誤用を産み出す要因が他動性という言葉普遍的な要因であることを示唆するものである。一方で、ベトナム母語の日本語学習者では動作主性に関連してヲの過剰使用による誤用が目立つことに関しては、今回の調査からは一般化が難しいということである。今後の研究に期待したい。(M.M.)

井元麻美 日本語教育実習の実践共同体の外に存在する支援者の重要性  
——非母語話者実習生の能動的な行動

本研究は、大学院の日本語教員養成課程における日本語教育実習時期における日本語非母語話者実習生の行動、なかでも、支援をめぐる能動的な行動に着目したものである。著者も指摘しているように、大学院に設置された日本語教員養成課程には、日本語非母語話者が数多く存在する。本研究では、その日本語非母語話者が実習時期においてどのように行動し、彼らにどのような支援者が関わっているのかを分析している。また、その分析を通して、日本語非母語話者実習生の学びを深めるには、支援者の存在や、支援者との関わりが重要であることを指摘する。一事例の分析・考察ではあるものの、支援者が実習の実践共同体の中にいるのか外にいるのか、また、日本語非母語話者実習生の支援者との関わり方によって、実習を通した学びの内容が変わってくるという指摘が示唆する点は大きい。本研究で目指していることが日本語教員養成課程においてどのような意味を持つのか、今後の展開が楽しみである。(S.P.)

---

## 王 昌 議論場における不同意の日中対照研究

### ——慣習化されたポライトネスとしての配慮表現を中心に

本論文は議論場面において相手の発話に同意しない時に、配慮表現をどのぐらい、どのように使用するかを日本語話者と中国語話者について調査したものである。意見が対立するようなデータを周到に集め、どのようなものを不同意とみなすか、また、配慮表現とみなすかという研究のステップが丁寧に記述されている。日本語母語話者が配慮表現を多く使っているという結果は驚くべきものではないが、本研究はさらに一步踏み込み、配慮表現の下位分類のうち共感表現は日本語話者に多いものの、緩和表現はむしろ中国語話者に多いことを明らかにしている。単に配慮をしている、していないという二元論は過去のもので、配慮をどのような形で表しているのか、ということがこの分野の焦点になっているといえる。(N.N.)

---

## 崔 沫舒 オノマトペ学習においてイラストを呈示する効果

### ——中国語を母語とする日本語学習者を対象に

オノマトペの豊富さは日本語の特徴の一つとされ、日本語学習者にとっては習得が簡単ではないものの一つである。しかし、日本語教育においてオノマトペは指導対象としてあまり重視されてこなかったが、近年はイラストによる視覚提示を試みる教材も増える傾向にある。しかし、視覚提示の効果については十分に検証されてこなかった。本研究は、こうした問題意識からオノマトペ学習においてイラストを呈示する効果に対する実証実験をおこなったものである。その結果、実験時は上位群も下位群もイラスト呈示に効果があったが、その効果は直後テストまで続かなかったことが明らかになった。ただし、本研究は実験環境によるものであるため、教育実践でも持続効果がないのかは未知数である。いずれにしても、どのような非言語情報の提示がオノマトペ学習に効果があるのかを実証的研究で明らかにしようとすることは、効果的な方法の模索に貢献するものであることは間違いない。(A.M.)

ニアムチャラーン・ニーラチャー

なぜ「コピュラ文」と「存在文」は談話主題を導入する際に用いられるのか——名詞句の指示性の観点から

日本語に限ったことではないが、先行研究が豊富な文法分野に比べ、談話分野はまだ開拓の余地が大きい。日本語教育への貢献を考えても、中上級への影響を考えると談話分野の開拓は大きく期待されることである。本研究は、名詞句の指示性の観点から「コピュラ文」と「存在文」が談話主題を導入される際に用いられやすい現象について、中学校教科書における説明的文章の調査から明らかにしたものである。コピュラ文も存在文も談話主題を導入される際に用いられる傾向があったことはもちろんであるが、変項名詞句と値の連続的出現が、文の主題導入機能の有無に影響することを明らかにした点が興味深い。こうした特徴は日本語母語話者にとっても無意識の結果の産物であるが、日本語学習者にとっては明示されることで「日本語らしさ」の習得につながる可能性が示唆される。(A.M.)

李 彪 テモイカの理解・産出の問題点は何か  
——中国の大学で日本語を専攻する学習者を対象に

近年の研究において、上級日本語学習者の誤用には、初級文法項目が多く含まれていることが指摘されている。本研究でも、初級で学ぶテモイカを、中・上級の中国人日本語学習者が適切に使えていないことに着目する。本研究は、中国人日本語学習者がテモイカを適切に使用できない原因を見出し、多角的な視点からデザインされたアンケート調査から検証を行っているだけでなく、教科書調査を通して、現行の指導法に見られる課題についてまで言及している精力的な論考である。中国人日本語学習者によるテモイカの誤用の原因を、中国語において対応する表現の意味用法とのズレから出発している点が興味深い。中国語を母語とする著者の内省を存分に活かしている論考である。ほかの言語を母語とする学習者には同様の誤用が見られないのか、また、実際の日本語教育の現場においてどのように指導するのが有効であるのかについての考察が気になることである。今後の研究に期待したい。(S.P.)